

外国人留学生及び研究者とその帯同家族に対する支援の在り方 —虹の会を対象としたフィールドワークを中心に—

伊東 義雄

近年、日本社会において国際化は加速傾向にあり、それとともに日本の大学では外国人留学生（以下留学生と略）や外国人研究者（以下研究者と略）の数が増加している。また、それとともに家族を帯同し来日する留学生や研究者も増えつつある。しかし、現在に至るまで留学生や研究者の家族に対してまでケアを行なっている大学は少ない。その中で、国際交流ボランティアである「虹の会」は筑波大学や周辺の大学に通う留学生及び研究者の帯同家族に焦点を当て、日本語教室の主催や日本語の個人指導、催しを通しての国際交流などを行なってきた。本研究では、このように留学生だけでなくその帯同家族に対しても支援を行なっている虹の会に焦点を当て、帯同家族に対するケアの在り方や虹の会のコミュニティとしての有用性を考察し、今後も増加していくことが予想される留学生や研究者とその帯同家族に対して、日本の教育機関がどう支援していくべきかを探ることを目的とする。

本研究では、筆者自身が虹の会にボランティアとして参加しながら参与観察やインタビュー調査を行い、虹の会メンバーに密着する形で研究を行なった。なお、調査対象者の中には日本語が不得手な生徒も複数名いたため、状況に応じて中国語・英語・日本語の3言語を使い分けながらインタビューを行なった。

調査を通して、帯同家族は留学生に比べコミュニティを形成しづらいことがわかった。また、それに付随する形で実践的な日本語を学ぶ機会が少ない状況に置かれており、帯同家族は日本で暮らしていく上で深刻な問題を抱えていることが明らかになった。このように、帯同家族として来日した人々は留学生や研究者として来日した外国人とは異なる環境の中で生活している。その中で虹の会はこのような人々に対し、日本語の学習支援、情報支援、コミュニティ形成の補助という3つの役割を果たしていることが窺えた。

また、虹の会に先生として参加している日本人ボランティアにもそれぞれ異なる活動動機が存在し、それらを内的要因と外的要因の二つに分類できることが分かった。これらの要因によって虹の会に参加を決めたメンバーの方々は、それぞれ高いモチベーションとボランティアである誇りを持って活動に取り組んでいる。更に、先生達には年齢や性別において共通点があり、先生同士も虹の会を通してコミュニティを形成していることが明らかになった。しかし、調査を進める中で、一見良好な関係を築けているように見えた先生と外国人生徒の間には、言語の壁や人手不足、近隣の大学との間にあるパイプの薄さから生じる様々な問題を孕んでいるという現実が見えてきた。これらの経緯を踏まえた上で、本論文では「地域に根付きながら経験とノウハウを培ってきた団体と、留学生などが所属する教育機関やそれに属する日本人学生などが、相互の弱みを補完しあえるような連携体制を構築していくこと」を新たな支援策として提言する。

(指導教員 照山絢子)